

「端っこからやるのは、すごいね」。職員が褒めると、畳の上でパズルをしていた子どもは手を止め、とびきりの笑顔を見せた。(パズルの虹のところは難しかったけど、ほじってきた)」

午後のおやつ後の自由時間。敦賀市の白梅学園乳児院に笑い声がこだまする。別の

あした

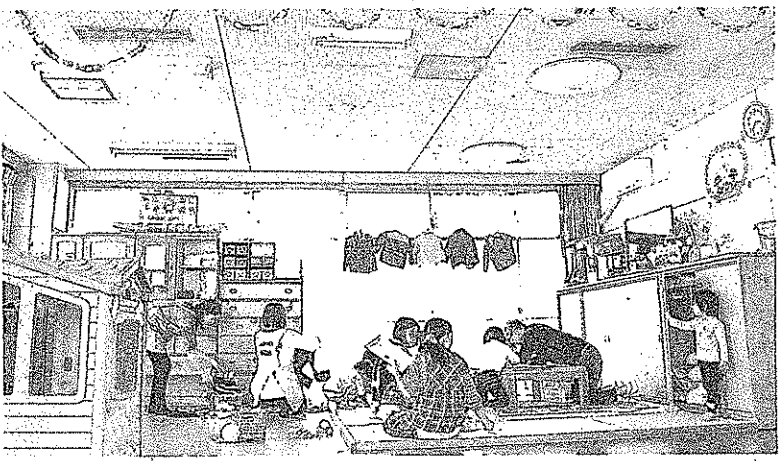
ふくい。子と親の風景

部屋では生後数カ月の赤ちゃんがすやすやと眠っている。この乳児院には0〜4歳の8人が入所。同学園は年少児から18歳までの子ども43人が過す児童養護施設も備えており、乳児院の子どもの多くは、そのまま児童養護施設へ

と移る。親に引き取られるとは少ない。同学園で約40年働く橋谷睦

連鎖する貧困虐待も

すさむ家庭 施設苦悩



悪臭が漂う部屋の中には、中身が入ったペットボトルなどのごみや、衣服が散乱していた。橋谷さんは、入所者の親の自宅に行ったとき、こんな光景に出くわした。ごみの分別ができません。ごみを出すために、朝早く起きることもできないという。

橋谷さんは、親と話し合いを重ね、子どもの家庭復帰を目指す役割を担う。しかし、散らかした部屋に住んでいたり、借金が減らない親の姿を見たりすると「幼い子どもを

戻すことはできない」と判断せざるを得ない。身の危険を感じるほどの暴言を吐かれたこともある。

以前は子どもの親が施設に面会に来ることは珍しくなかったが、最近は声を掛けても来なかったり、連絡すら取れなかったりすることもある。

「親たちは、自分が生きることで精いっぱい」。橋谷さんの目にはそう映る。

「親から子へ、貧困は連鎖している」と話すのは、同学園の木越直昭園長(64)。十分な教育を受けられず、進学や就職で不利になり、子どもも貧困になるという構図で「義務教育期間中に必要な費用を無償にするなど、子どもが平等にスタートできる環境を整えるべき」と訴える。

貧困は児童虐待とも深くかかわっているという。木越園長は「先行きの見えないイラストが、弱者の子どもに向か

(堀英彦)

■ 3 ■